



- 巻頭エッセイ アクティブラーニングは教育のディスラプトか..... 1
- 第4回「英語の教え方教室」合宿・勉強会 in 若狭報告 2
 - ・ 基調講演、グループ討論①「やってよかった言語活動とその評価」..... 2
 - ・ グループ討論②「指導上の工夫・悩み」..... 3

- 授業の玉手箱 教育実習を経た学生の成長 4
- 書籍紹介『教育 変革への展望1「教育の再定義」』..... 4
- 第 44 回勉強会「英語の教え方教室」簡易報告..... 4
- 「勉強会」今後の予定..... 4

巻頭エッセイ アクティブラーニングは教育のディスラプトか

東條 加寿子

ディスラプトとは、破壊すること。シリコンバレー発といわれるこの概念は、会社組織内で事業を起こすよりも自分でスタートアップする方が簡単で合理的という起業環境の中で、新鋭の起業家によって立ち上げられた新規事業が、大企業などの既存事業の組織や常識を崩壊させる、すなわちディスラプトする、といったコンテキストで用いられます。辞書的意味は「破壊すること」ですが、これまでの組織や常識などを崩壊させることにポジティブな価値観を込めて「創造的破壊」と訳されることもあります。NHK「ニッポンのジレンマ」(2016年5月1日放送)では「ディスラプトって何だ?」と題して教育のディスラプトが取り上げられました。今、よりよい教育を求めらる中で、私たちは既存の教育を崩して新しい教育への転換を追求しようとしているのでしょうか。壊そうとしているのは何なのか、そして新たにどのような教育を構築しようとしているのか。番組の出演者が1975年以降生まれの若い論客ばかりであったこともあり、シャープな切り口の教育論は新鮮です。本小欄ではその切り口を用いて、来るべき学習指導要領改訂で掲げられている「アクティブラーニング」を教育の「ディスラプト」の観点から考察するものです。アクティブラーニングを切り札に、私たちは既存の教育の何を壊そうとしているのでしょうか。そして新たにどのような教育を構築しようとしているのでしょうか。

文部科学省中央教育審議会(2012)答申の中で、アクティブラーニングは「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学修法の総称」と定義されています。他に、Bonwell & Eison (1991)による「学生自身が活動し、その活動自体について思考するような取組のすべて」といった定義もあります。さまざまな定義から、アクティブラーニングは「能動的な学修の総称」であり、これによって、知識獲得型(知識偏重型)の教育、教員主導型の教育からの脱却を試みるものであると捉えることができます。冒頭で紹介した番組でも、ディスラプトのターゲットとして、教員が教えすぎる教育、わかりやすすぎる教育、自ら学ばない教育があげられ、「教員が教えないことが重要」との極論まで飛び出しています。

ここで、「知識」の観点から教育を整理すると、知識には大きく分けて一般的知識と専門的知識があると言えます。大学教育についていえば、一般的知識は主として大学1,2年で学び、専門知識は大学後半に学びます。さらに、専門知識を獲得するには、知識定着型の学修と問題解決型の学修があるといえます。理系では専門用語や専門知識・概念の獲得が学びを進めていくために不可欠なステップで

ある一方で、文系では社会問題についての議論など、初めから問題解決型の学びに取り組むことが可能で、アクティブラーニングは知識獲得型・問題解決型それぞれについて有効な教授法です。このように見ていくと、ディスラプトの論点は、教育を知識獲得・定着型から問題解決型に転換しなければならないといった短絡的なものではないことがわかります。情報社会の現代においては、情報を収集し、整理・理解し、自ら問題を解決する能力が重要ですが、このことが、体系的に基本的・専門的知識を獲得することの重要性とすり替えられているとすればあまりにも表面的な議論であると言わざるをえません。実際、知識の伝承は教育の最も大きな使命の一つです。知識という学びのコンテキストをもって初めて現代社会で主体的に学び、問題を解決していく力を育むことができることを見失ってはなりません。

アクティブラーニングがディスラプトするのは、知識の質量といった教育内容というよりはむしろ教育の方法に係るものと言えましょう。教育の方法がいくつかのパラダイムシフトを経てディスラプトされてきたことはこれまでに私たちが体験してきたところです。1960年代頃からの行動主義に基づく学習理論から1980年代頃の認知主義的学習理論へ、そして今、ヴィゴツキーの活動主義にもとづく学習理論が時代の価値観となっています。学習者は社会との関わりによって理解を深め知識を内化するのであり、学習者と社会の最近接領域が学びの最適化領域であるとするヴィゴツキー理論と同じパラダイムの中で、アクティブラーニングは教育方法としてその妥当性を保証されています。

さて、アクティブラーニングの隆盛は、教育の現場にさまざまな影響をもたらしています。ましてディスラプトされるのが教員主導の教育方法ということであればなおさら、教員には抵抗感や困惑があり、ベテランであればあるほどその度合いは強いのかも知れません。『教育の方法』の著書のまえがきで佐藤は、教育の方法に関する問題は、誰もが体験してきたなじみのある問題であるとともに、体験にもとづく先入観や思い込みが新しい発見や認識を妨げる危険があると指摘しています。これまでにITCの導入等、様々な教育改革ビジョンが示されてきましたが、アクティブラーニングの推進はこれまで以上に教員の授業デザイン力に依存しており、新しい教育改革の成否は一人ひとりの教員にかかっていると言っても過言ではありません。ディスラプトの当事者となる教員の熟達は今求められています。

Bonwell, Charles C., & Eison, James A. (1991). Active Learning: Creating Excitement in the Classroom, Jossey-Bass
佐藤学 (2011).『教育の方法』. 放送大学叢書.



大阪女学院大学 教員養成センター

平成 28 年 5 月 7 日(土)・8 日(日)

第 4 回「英語の教え方教室」合宿 in 若狭 於：福井県立若狭高等学校

テーマ：アクティブ・ラーニングを見つめ直す

今年もまた、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、三重、福井から約 30 名の高等学校と中学校の先生、大学生が集まり、福井県立若狭高等学校（三仙先生幹事）で第 4 回の勉強会合宿を行った。

■ 基調講演（簡易報告）

「アクティブ・ラーニングを見つめ直す」

—学習者の学びを深める言語学習活動—

大阪女学院大学 中井 弘一



1. アクティブ・ラーニングの言葉がもたらす弊害

まず、アクティブ・ラーニングの定義（身に着けた知識・技能をどう生かすか）を話された。アウトプットがアクティブ・ラーニングであると誤解されがちだが、協同学習を行うにしても、わかるレベル（Intake）の促進を考慮し、知っているレベル（Input）と「思考・考える」レベルの位相を認識し、そうしたレベルに対応した活動をしっかり組み入れたらなければ、思考がアクティブになることはない。

アクティブ・ラーニングが求められる背景としては、米中韓の生徒にくらべて日本の高校生の「自己肯定感」の低さが目立っている。教育格差（ロボットの子どもが増えている・教育産業が教育に入り込んでいる）が目立つ昨今、生徒の学習の様子を見て授業をすることが重要である、と話された。「やらせる」ものが多く、生徒にとって「気づき」や「思考の過程」を評価するものになっていないことが問題である（プロセス・カットの功罪）。→「受け身型の人間の育成」につながっている。「白いノート」の提案←書かれたもの、話されたものを写す（移す）だけでは、不十分で問いかけを入れる。「これはどういうこと？」と尋ねてみるのが重要である。「自学ノート」で、「自分で考えてノートを作成する」というプロセスが必要であると話された。

2. では、なぜ「アクティブ・ラーニング」なのか

加えて、アクティブ・ラーニングは、学習形態に意味があるのではない。「アクティブ・ラーナーを生み出すことが重要」であり、アクティブに活動をしていることではなく、学びそのものがアクティブであることが大切である。コミュニケーションとは「異質なズレを受け入れる」ことであると話され、柔軟な思考で問題の本質を見抜き、臨機応変に対応できるリーダーの育成が必要である、と力説された。

学力の3要素「基礎的・異本的な知識・技能」「課題解決のために必要な思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」をはぐくむにはどうすればよいか。それには「どのように学ぶか」を考えていく必要がある。そこで、アクティブ・ラーニングについて我々が正しい知識を得て、生徒に思考力をつけさせる授業を行っていくことが必要になってくるのだ、と述べられた。

グローバル化の進行により、ポイントは知識を「いかに活用するか」にニーズがシフトしてきている。だからこそ、「学習者の思考をよりアクティブに」することが重要なのである。学習の「習得」サイクルと「探究」サイクルを活用型学習のもとに行っていくことで、定着を図ることが目指すべき授業の形である。

3. では、どのように「アクティブ・ラーニング」を促すのか

engagement が重要である。とりわけ、emotional に考えさせることが重要である。また、「わかる」授業であることが重要であると述べられた。学習者の思考に意味があることが重要であり、そのため教員は授業目標を明確に持ち、生徒が思考を活性化する学習活動を求めることだ。次に、有名な「Not so long ago」を題材にして、どのように生徒に思考を促すかを演習形式で説明された。すぐれた発問は深い教材研究の必然的な結果である、と述べられた。思考を促す発問を行い、生徒の「思考がアクティブ」になるように我々は授業準備、教材研究をすることがわれわれの必要条件である。講義型、生徒参加型、生徒主導型を通じて「思考を活性化すること」が重要だ。

4. 「アクティブ・ラーニング」を再考する

アクティブか、そうでないかの二項対立でよいのか。アクティブ・ラーニングの弱点は、そこに個人個人の学びが保証されているとは限らないのではないかと、ということである。協同学習に対して生徒が好きである

かどうか異なり、またこれまでの学習形態との違いに戸惑うこともあり得る。英語（らしきもの）を話し合わせるだけではなく、そうなのかと思わせる英語の手本を教師が示し、知的好奇心を育む教養を示すなどして、「生徒を」より深いアクティブなラーナーに育てていくことが重要である。「教えて考えさせる」授業の必要性。生徒の思考の活性化を促し、教員が「わかろうとしている」生徒を指導方法や指導力や指導意欲のもと、導くことが必要である、と述べられた。

報告：三仙 真也（福井県立藤島高等学校）

■ グループ討論①：

「やってよかった言語活動とその評価の在り方」（簡易報告）

1班 MC 渡辺 千景（福井県立敦賀高等学校）

中学校では授業中に3分の1は speaking 活動を行っている。（教科書に出てくる単語の読み・ペアで対話・英語の歌）文法を教える際にも、ルールを教えるから使わせるのではなく使いながら気づかせる。（帰納法）英作文の評価として、減点法よりも加点法に。（例）語彙・文法・内容・加点（5文以上）英作文の活動応用編として同じトピックについて1ページに3人で書いていく「リレーノート」を紹介。トピックの選び方を、教師の趣味にならないように選ぶ必要性あり。教科書に即した内容にしたほうが良い。また、書かせたものを教室内でグループで共有し代表者が全体で発表してもよいのではないかと。

2班 MC 梅田 武幸（福井県立若狭高等学校）

各先生方に共通している点は“見た目だけの活動”にならないようにされている点である。例えば、音読活動は非常に重要であり、生徒の英語力を向上させるためには有効なものであるが、慣れてくると思考を働かせる必要はなく、単に「読んでいるだけ」という状態になってしまう。そこで、音読をアウトプットへの一つの過程と捉え、最終的には自分の言葉で要約をさせることが重要であるという意見が各先生方から上がった。

評価に関しては生徒同士の評価、Can-do を活用した評価の在り方などについて議論した。評価の在り方については私自身も試行錯誤中であり、討論をする中でも「活動を評価するのは難しい」、「結局定期テストの比重が大きくなる」といった点が課題として挙がった。しかし、今回の討論を通じて、生徒がなぜ自分がその成績なのか分かるという仕組み、評価の在り方は非常に重要であると感じた。

3班 MC 大橋 夕紀（福井県立若狭高等学校）

教科書の題材に合わせて、グループ・プレゼンテーションを行う。グループ内でそれぞれ役割ができ、英語が苦手な生徒でもポスター作成で活躍できたり、教え合いができる環境になったりすることで意欲的な学習につながる。グループでの評価になるため、個人で発表するのが苦手な生徒も頑張ることができる。

活動自体も大切であるが、グループの中では「どのようにその材料を扱えば生徒が意欲的に取り組むか」について考える場面が多かった。同じ題材を扱っても、生徒が「自分ではできる！やろう！」という意欲を持てるような言葉かけや仕組みがあれば、より効果的に生徒を Active Learner へ導くことができると考える。

4班 MC 板垣洋美（福井県立武生高等学校）

共通した話題は次の2点。

①「自分の意見・考えを何とか表現したい」という思いを教師がいか



に没んでやるか、その機会をいかに与えるか

- ・ 思いはあってもその方法がわからない生徒たちには、まずは型を与えてドリル形式で慣れさせる。

- ・ Small Steps を設けることなど Slow Learner の生徒への工夫をする。

②活動を行った後の評価、生徒へのフィードバックについて

教師による評価、生徒による相互評価、自己評価などその形態は様々であるまずは評価について欲張りすぎず、ポイントを絞って評価させる教師は良かった点について一つ見つけてほめる、などシンプルなことから始めるという意見があがった。

5班 MC 牧野剛士（福井県立敦賀高等学校）

- ・ コミュニケーション英語のワークシートに、必ず「意見・考え」を言わせるような pre-reading 活動と post-reading 活動を取り入れている。また、必ず各パートの最後に各学期最後に行うインタビューテストと同じ評価項目の表を使って自己評価をさせている。
- ・ コミュニケーション英語の時間を使い、チャプターによっては普通の授業の形式をとらずに、「ディベート」を行っている。ただし、いきなり定型のディベートの形式をとるのは厳しいので段階の手順をとっている。徐々にアカデミック・ディベートの形式に近づけていく。
- ・ 教員からの評価だけでなく、必ず「自己評価」をさせている。それと同じ評価項目を使ってパフォーマンステストを評価することで、生徒は常に先を意識して言語活動をリフレクションできる。
- ・ 各学期の最後に行うパフォーマンステストの評価基準や各学期の成績の配分を学期初めに提示することで生徒は目標をもって授業に取り組むことができる。

6班 MC 辻 智生（福井県立敦賀高等学校）

○低学力者への指導の中での言語活動のあり方。

英語力を考えると生徒の自由度の大きい活動は難しく、教師は躊躇する。即効性のある妙案はないが、まずモデル文を作り、幾つかのポイントを置き換えれば自分の言いたいことができる。また一言でも一文でも話す経験を地道に積み重ねることも必要だということ、生徒の動機付けを図ったり思考させたりするという意味で映像の利用や他社の教科書の英文を使用し読ませることも有効な手段であると意見が出た。「1分間に120語話す」のように具体的な数字を示して取り組ませることも動機付けという意味で有効だという意見も出された。

○ディベート指導

中学校でも段階を設ければディベートは可能であることを示していただいた。教師が勝手に生徒の限界を作ってはいけないということであらためて実感した。ディベートには様々な側面があるが、それら全てを評価することは難しい。時間の面からも実用性の面からも細かいことを気にするべきではなく、幾つかのポイントに絞って評価するべきであるという結論となった。

7班 MC 水谷 友梨（福井県立若狹高等学校）

- ・ Reading Power という教材を使って、直読直訳の徹底を行っている。今までは、サイドリーダーを使っており、また、シェイクスピアなど原文を読む活動も行ってた。やはり、原文で読むほうが魅力的で意義がある。
- ・ ことわざを大切に。忍者に興味があり、先祖が子孫に受け継がせた教えであることわざも似ているところがある。ことわざには、生き残るすべが書かれている。また、国や文化をことわざから学ぶことができ、さまざまな知識を得ることで自己肯定感も手に入れることができる。
- ・ NHK 教材のエンジョイ・シンプル・イングリッシュ。海洋科学科の生徒に帯活動で読ませ、トピックに関することを自分自身のレベルで考え、意見を話し合う活動を行う。

8班 MC 泉 美穂（神戸大学附属中等教育学校）

1. やってよかった言語活動紹介

- ・ 本文を読んだ後にグループ毎に各セクション毎に気に入ったところ、impressive だった箇所を選び、理由を言う活動を取り入れた。パラメンタリー・ディベートの講習会を学校でしたのもあり、summary & refute を参考にした。①4人1組のグループで本文の気に入った箇所を説明する + 自分の意見を言う、②前の人が話したところを言って、更に私はこう思うと意見を加える、という形で取り組みをさせた。型にはめて繰り返し続けることによって、意見を言うトレーニングになった。

2. 言語活動の評価の在り方について

- ・ 評価をどうして良いのかが分からなく困った。一時間の中でプレゼンテーション作成までさせる展開であったので、script に文法の違いがあるものをどう評価するべきなのかというところが難しかった。また一つ一つの活動をどうやって評価するのが悩ましい。授業観察のみになりがち。果たしてそれで良いのか。

3. 新たに得られた知見・気づきなど

- ・ ディベートまたはディベートから得た意見、理由を述べる必然性を作ることによって、意見を言わせる活動を増やすことができる。
- ・ サマリー活動も話さなくてはならない内容の必然性を作ることによって、生徒の読みを深めることができる。
- ・ YouTube や IT 機器を活用することによって反転授業など授業時間内だけでなく予習や復習に学びを増やすことができる。

■ グループ討論②：「指導上の工夫・悩み」（簡易報告）

1班 MC 喜多 千穂（大阪府立阿倍野高等学校）

語彙指導について、単語帳を持たせた上で小テストを実施することで語彙力はつかか？語源を紹介して語彙を増やす方法についてはどうか？どうしたら語彙力がつかか（豊中高校・北村先生）→単語帳や小テストでは短期記憶で終わり、語彙力の増強にはなりにくい。ドリルとしては一定の効果はあるが回数は必要。*内容のある英文の中で、学習していく方がよい*口頭での練習やテスト。*表現集などをアプリで作成、ネットで生徒が見られるようにしている。*単語テストは、やらないと生徒は勉強しないが、やっても定着しにくい。

2班 MC 大仲志芳（羽衣学園高等学校）

音読活動をどのように評価すればよいか？

- ・ 目標を生徒に示す。例えば一分間に100語読めるようにするなど、具体的な内容を示す。
- ・ あらかじめ評価のポイントを生徒に示しておく。どこをどう評価するか、これできていれば Grade X というようにするなど、明示しておく、モチベーションが上がるのでは。

3班 MC 植田 早（奈良県立青翔中学校・高等学校）

将来的にはディベートをさせてあげたい

- ・ ディベートに行き着くまでに、ペアワークの活動を入れつつ徐々に内容を深めていくことで目標を明確にして計画を立てることができ、将来ディベートにつなげる。授業時数なども考え、少ないならパーラー、多いならアカデミック・ディベートを行うようにする。

4班 MC 浦川 真緒（京都教育大学3回生）

○生徒の英語の質が期待している程に向上しない

その要因として、適切な補助が不足していること、評価基準の明確化が不十分である。インプットした内容を踏まえ、いかにその内容をアウトプットする場を設けるかが重要である

5班 MC 南 侑樹（大阪府立槻の木高等学校）

○Task-based instruction について

- ・ タスクを通して、言語形式だけでなく、意味重視の学びにつながるようにしている（CLIL のアプローチ）
- ・ 必ず場面を設定した上で誰が何を伝えるのかを、意識している。
→ その上で頂上タスクとして自らが学びをレポートできるように工夫している。

6班 MC 池田 裕（大阪府立枚方津田高等学校）

英語をなぜ勉強しなければならないか

- ①日本語だけなら窓が一つ、他の言語を学ぶことにより、窓が増える。
- ②言語というポケットを増やせば、それだけ友達もできる。
- ③英語という言語を学ぶことにより、日本語を意識することができ、日本という国を再認識できる。

7班 MC 戸田行彦（滋賀県立守山中学校）

評価には Fluency や Accuracy の両方が実際は求められるが、まずは Fluency から始めることが大切であると確認。具体的にはワードカウンターを用いてペアになり片方が1分間与えられたテーマに沿って話し、もう一方がペアの話した1語1語を数えていくといった手法がある。



授業の玉手箱

教育実習を経た学生の成長

夫 明美

今年も教育実習の時期がきました。学生たちは与えられたチャンスに一生懸命取り組んでいます。筆者が担当する短大の授業では、指導案作成から模擬授業の実施という「シミュレーション」を行っています。

指導案作成にあたっては、当該レッスンに至るまでの既習事項を踏まえて教材研究を行います。模擬授業では、各学生のデモをビデオで撮影し、後日再生しながら相互評価を行っています。学生自身が「自分のパフォーマンスを客観的にみる」こと、学生が「相互に建設的に批判・助言すること」を目的にしています。

多くの学生はカメラ付き携帯電話で、「自撮り」になれている世代ですが、「授業担当者」としての自分の姿を見ることは、「評価」が加わるためか、不安を感じるようです。また、自己評価のコメントを読むと、「自分の欠点ばかり」記述する学生も数人います。しかし、大半の学生はじっくりと自分とクラスメイトの模擬授業を観察して、建設的な批判や助言を記入しています。また、他者の模擬授業からヒントを得て、教育実習期間の授業や、実習後に行う2回目の模擬授業へ改善がみられることも多くあります。

まもなく実習を終えて、本学に戻ってくる学生が、2回目の模擬授業でどのような良い変化を見せてくれるのか、気を引き締めつつ楽しみに待っています。

書籍紹介

〔岩波講座〕教育 変革への展望1「教育の再定義」
編集委員：佐藤 学、志水宏吉 他、岩波書店
(2016/4/28)、3,456 円、304 ページ

時の中曽根内閣の「臨時教育審議会」あたりから使われ出した「教育改革」という言葉が耳に馴染んで早くも四半世紀が経過しようとする。この間、その時々の社会情勢の影響を強く受け、「教育改革」の錦の御旗のもとで、手を変え品を変え様々なメニューが登場してきた。

現在、教育は「量」の時代から「質」の時代への転換が喫緊の課題とされ、教育内容、アクティブラーニングに代表される学びの様式等、イノベーションが求められ、「教育改革」という言葉は一種の社会現象のごとくに教育現場に押し寄せている。

しかしながら、それらは見方によれば、子どもや教員や保護者の声から出発するというよりも、政治、経済、マスメディアなどの外在的な力によって発せられ、教育の内在的な規範や実践を突き崩すという深刻な状況と、排除と差別による教育格差の顕在化という現象を生み出しているのではないかと指摘もある。

本書はこのような課題認識の上に立ち「教育改革」の実践的、理論的、政策的課題を教育の内側から問い直し、教育に携わる教師、学生、研究者に信頼しうる知見を提供することを企図し、「教育格差と教育政策」、「教育改革の中の学校」、「グローバル時代の教育」など5項目にわたり、それぞれ著名な編集者の論文と対談形式で構成されている。

充実した読み応えのある書物であることから、今後発刊予定のものと同併せ全7巻を揃えられることを勧めたいと思う。
(中垣芳隆)



者の自律と意欲向上をめざした協働学習、生徒のスピーキングを重視した活動、パフォーマンス・テストやグループ・サマリーやプレゼンテーションを取り入れた活動など日頃、山根先生行われている具体的な実践内容を参加者に共有していただいた。参加者は11名とやや少なかったが、充実した話し合いを行うことができた。

最初に山根先生が問われた“Active learning”を参加者はどう考えているか、フロアーからの意見を聞いた。「生徒による能動的・自発的な活動による授業」「生徒の個性を尊重しながら自分で考え学び合う授業」などとフロアーから回答があった。自主的、能動的という言葉はよく使われるが、「言葉が踊る」きらいがある。具体的には何をどのようにすることが自主的・主体的になるのかわかりにくい。ただ、現実にはそうした理解にとどまっていることが多く、管理職が錦の御旗のように“Active learning”と教員に迫っていることもあるようである。こうしたプレインストーミングのあと、Kagan(1994)の“Cooperative Learning is a teaching arrangement that refers to small, heterogeneous groups of students working together to achieve a common goal.” Dörnyei(2001a)の“Cooperative learning has been shown to generate a powerful motivational system to energize learning.”などと「協働学習」に関する文献を紹介された。

そのあと、Jigsaw Reading 例を紹介された。“Big Dipper English II”のLesson 7が4パートで構成されていること活用して、パート毎にエキスパート班が「語彙調べ、読む練習、メインピック、内容の要点、重要なポイントの整理、大切な文法や語法の確認、キーワードを使つての要約」などをまとめ、班に戻って内容を理解し合うという授業展開であった。教員は scaffolding として observer として必要があれば助けるという役割で、生徒が小先生となって教え合う形態と思われた。生徒は積極的に活動に参加し、英語嫌いの生徒が活躍したとのことであった。Jigsaw Reading は、異なる3~4つの共通教材が一つに詰め込まれて初めての全体の意味合いがわかり、それにより思考が活性化される教材を扱うのではないかとフロアーからの意見もあった。

Group summary & presentation 活動は、一斉授業で活動の説明、語彙の練習、重要事項の説明、音読練習、Summary Dictation などのあと、学習した教材のストーリーをグループに振り分け、各グループでまとめて発表させるものであった。その際、performance 評価を取り入れ、ルーブリックを事前に示して、どう評価されるかを生徒に確認させているとのことであった。詳細報告は本学 HP を参照。(中井)

「勉強会」今後の予定

■第45回勉強会「英語の教え方教室」

平成28年7月9日(土) 14:00 ~ 17:00

「授業をリフレクションすること - 自分の授業実践を通して -」

大阪府立槻の木高等学校 南 侑樹 教諭

リフレクションや生徒とやりとりを通していかに授業が変容していくかについてご自身の授業実践を南先生にお話いただき、その話題をもとに参加者の皆様と話し合う。

■授業デザインスキルアップ演習(無料講習)

平成28年8月10日(水) 10:00 ~ 16:30

「英語の世紀」に生きる - グローバル時代に本物の英語を教えるために -

大阪女学院大学 教授 中井弘一

グローバル時代に必要な本物の英語とは何か、グローバル時代の英語授業はそうあるべきかを考える。

申し込みは7月11日(月)までに

詳細は <http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/ttc/course>



編集後記

今夏も教員免許更新講習1・2を行う。それぞれ50名を超える参加申し込みが一週間であった。気を引き締めてがんばりたいと思う。

第44回勉強会「英語の教え方教室」簡易報告

平成28年6月11日(土) 14:00 ~ 17:00

「Active Learning と英語教育実践

～学習者の自律をめざして～

姫路市立飾磨高等学校 山根 貴子 教諭

姫路市立飾磨高等学校の山根貴子先生に、アクティブ・ラーニングの実践についてお話いただいた。学習



大阪女学院大学・大阪女学院短期大学
教員養成センター Teacher Development Support Center

540-0004 大阪市中央区玉造2丁目26番54号

Tel: 06-6761-9371 Fax: 06-6761-9373

Homepage: <http://www.wilmina.ac.jp/ojc/edu/ttc>

e-mail: ttc@wilmina.ac.jp